第1章 戦場

東京での終戦

突然の出動命令

近藤勝雄さんのお話から

昭和十九年（一九四四年）、二十歳だった私は徴兵検査を受け、甲種合格で日本陸軍に入隊しました。出征当日には、自宅に親類が大勢集まり、日の丸を背負った自分を囲んで記念撮影をするなど、大いに祝ってくれました。その当時はすでに戦局はかなり悪化していたはずですが、国民にはいっさい知らされていなかったので、親類一同から「元気に行ってこい。」と励まされて送り出されました。

入隊後は、現在の東滝川にあたる幌倉という町で初年兵として厳しい訓練を受けました。当時六十キロあった自分の体重が、約三か月の訓練で四十五キロに減ってしまいました。食糧事情が悪かったこともありますが、上官や先輩に殴られない日はないという厳しい訓練の毎日だったので、すっかり体重が落ちてしまったのです。

昭和二十年二月、幌倉での初年兵訓練が終わり、近衛師団に配属となりました。汽車と船を乗り継いで、仙台経由で東京に入り、兵舎のあった現在の日本武道館のある場所に移動しました。配属は東部第三部隊近衛歩兵第二連隊相沢中隊でした。

近衛師団では、被服が一装用、二装用、三装用と三種類も支給されました。外地に行っている兵隊は着るものもなかったらしいのですが、私たちは違いました。天皇陛下のいる宮城に入るときは、一装用の真新しいものを身につけます。普段は三装用を着るというように使い分けていました。当時は自分の荷物を入れるロッカーのようなものがなかったので、自分の服をきちんとたたんで積み上げなければなりませんでした。積み上げ方が少しでも曲がっていると将

○徴兵検査　徴兵適齢の男子に、兵役の適否を身体・身上にわたって検査すること。

○近衛師団　大日本帝国陸軍の師団の一つ。天皇と皇居を警衛する。

○宮城　天皇の住居。戦後、皇居と改められる。

○将校　位が少尉以上の軍人。軍隊において、戦闘の指揮をする士官。少尉以上の武官。

○東京大空襲　約十万人が亡くなった昭和二十年（一九四五年）三月十日の空襲。空襲があったのは、深夜〇時七分。冬の北西の季節風が強かったため、火災が広がり、被害が大きくなった。

○B29　第二次世界大戦末期に登場したアメリカ、ボーイング社製の大型長距離爆撃機。一万メートルの高高度を飛んだ。北海道以外の日本空襲にはほとんどこの飛行機が使われ、広島・長崎への原爆投下にも使われた。

○焼夷弾　火災を引き起こすために作られた爆弾。

校が来て、「折り方が悪い。」とみんなひっくり返されてしまいます。

「そんなことをしても戦争に勝てるわけがない、なぜこんなことをするか。」と聞きたいぐらいでした。しかし、そういうことを行っている将校も申し送りで代々やっているだけなので、どうしようもありません。

配属されて間もない三月十日、東京大空襲に遭いました。B29爆撃機が東京上空に何百機もやってきて、日本軍の高射砲では届かないような高度から、何千、何万という数の焼夷弾で街を焼き尽くしてしまいました。当時、私たちがいた宮城は小高い山にあったので、東京の街が真っ赤な炎に包まれていくのがはっきりと見えました。その頃の日本には、対抗できる飛行機はもうありませんでした。空はB29が覆い尽くしてお



イメージ図

空襲後の東京の街並み

○隅田川　東京湾に注ぐ全長二十三・五キロの一級河川。

○御文庫　空襲時に天皇の避難する防空建物として着工。地下は避難壕として建築。

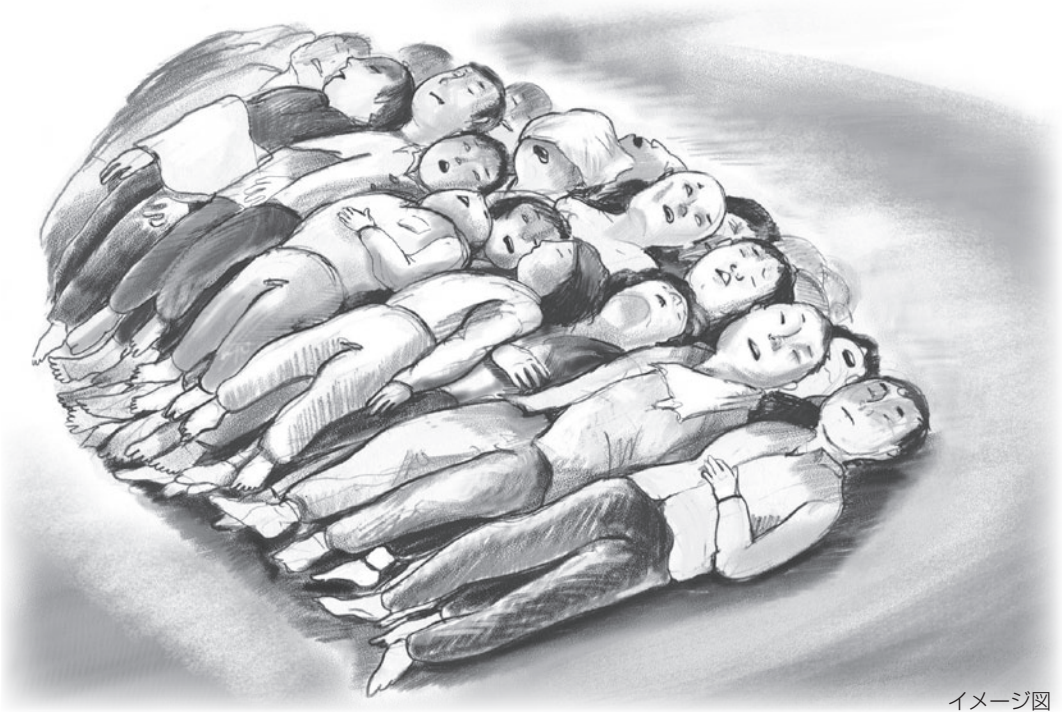
○坂下門　宮内庁の正面にある。皇居に出入りするのにいちばん使用される。

○玉音放送　天皇自身の肉声による放送。特に終戦を伝えるラジオ放送を指すことが多い。

り、やられっぱなしでいるしかありませんでした。戦後になってから天皇がいる宮城は空襲の対象から外されていたと知りましたが、当時はそんなことはもちろん知りません。いつ、ここも爆撃されるかと思っていました。空襲の後は、道端におびただしい数の死体が転がっていました。隅田川も死体でいっぱいになってしまったのです。その遺体を日本軍の兵隊が運んで集めては火葬していました。

終戦前日の八月十四日午後、突然上官から出動命令が下りました。完全武装で、渡された実弾を持ち宮城に入りました。私たちは天皇陛下の住居である御文庫近くにいましたが、周りを見ると私たちのような部隊がたくさんいました。その日は宮城の中で野営をして仮眠をとりました。夜明けに坂下門前に集合したところ、「本日正午から、かしこくも天皇陛下より重大放送がある。」と連絡されました。元の部隊にもどり、玉音放送を聞いたのです。

この出動命令が実は反乱だったということは



イメージ図

おびただしい数の死体

後から知りました。終戦に反対した青年将校が玉音放送をやめさせるため、録音盤を奪う目的で行動したものだったのです。本土決戦の決意を天皇にしていただくため、青年将校が内閣の決定や参謀総長の方針に従わず、近衛師団長を殺害してまで軍隊を動かしたのです。当時、上官の命令は天皇陛下の命令であるという教えだったので、命令の意味や理由を聞くことなど許されるわけもなく、私はただ従って動いていました。

終戦後、現在の皇宮警察のような仕事に一年間つきました。先輩に「お前らは若いんだから。」といわれ、東京に残ることになったのです。当時は宮城を警備する人もなく、志願者もいなかったためです。この先輩とは最後に「これから平和な世の中で何か活躍しなさい。」といわれて別れたのを今でもはっきりと憶えています。

当時は「靖国で会おう。」を合言葉に、お国のため、天皇陛下のために戦って死ぬことは名誉なことであり、自分自身も生きて帰ることなど思いもしませんでした。しかし、不思議と怖いといった思いはいっさいありませんでした。おそらく当時の教育がそうさせたのだと思います。今になって教育は大切だとつくづく感じています。

参謀総長　大日本帝国陸軍を司った機関の長。

靖国　東京都千代田区にある神社。明治維新およびそれ以後に戦争など国事に殉じた者二五〇余万の霊を合祀。

DATA

平成21年度西区平和事業
聴き取り
・平成21年9月18日
・発寒北まちづくりセンター



近藤勝雄(こんどう・かつお)さん
・大正13年(1924年)生まれ
・札幌市西区在住